

凍結前の胞胚腔収縮は移植成績に影響する ～凍結前観察における移植胚盤胞の選択～

柴田美智子¹、中野達也¹、佐藤学¹、中岡義晴¹、森本義晴²

1 医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

2 医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

胚の経時的形態変化を解析することにより、胚盤胞において胞胚腔収縮回数が増えるほど凍結融解胚の着床能が低下する。しかし、経時的観察していない場合は収縮回数を確認できない。そこで、処理前の観察のみで胚盤胞収縮の有無を確認し、妊娠率・流産率に関連があるか検討した。

【対象および方法】

2013 年 1 月から 2016 年 2 月までに単一胚盤胞の凍結融解胚移植を施行した 2063 周期を対象とし、凍結前の胚盤胞の収縮の程度を画像上で確認した。検討は拡張群と収縮群に分け、妊娠率・流産率を比較した。さらに、2 群を凍結時期、栄養膜外胚葉(TE)の Grade 別に妊娠率・流産率を比較した。

【結果】

患者年齢は拡張群:36.3 歳、収縮群:36.5 歳と差はなかった。妊娠率は収縮群(30.2%)に比べ拡張群(48.6%)で高かった($p<0.05$)。また、流産率は拡張群(29.5%)に比べ収縮群(48.3%)で高かった($p<0.05$)。

凍結時期を分け比較したところ、5 日目の胚盤胞では妊娠率は拡張群で有意に高かった($p<0.05$)が、流産率で差はなかった。6 日目の胚盤胞では妊娠率・流産率ともに差はなかった。さらに 5 日目の胚盤胞を TE の Grade 別で比較したところ、TE-A・B 群では妊娠率は拡張群で高かった($p<0.05$)が、流産率に差はなかった。TE-C 群では妊娠率・流産率ともに差はなかった。

【考察】

凍結前の観察のみでも移植胚盤胞の選択に十分な指標となり、拡張している胚を優先する事が有効であると示唆された。収縮胚は優先順位を落とすことが望ましい。さらに、6 日目の遅延胚盤胞よりも 5 日目の方がより影響を受ける事が明らかとなり、Grade での選択だけでなく、収縮の有無も加味するべきである。